

真 生

第 七 卷 第 六 號



□ 靜に自己を反省すれば自分と云ふものに身心の二面がある。乍然此の身心が直に私そのものでないことは少く其身心の何ものであるかを考察すれば明かである。

□ 佛教では私共の身心を凡て因縁によつて生じたとするが常であるの云ふ、從て因縁によつて生じたものは又因縁によつて滅するも常である。

□ 從て、私共の身心は因縁によつて生じ、因縁によつて滅するが常である。そこには何等の永劫なるものもなく、何等の不滅なるものもない。

□ それを佛教では無常と云ひ、又無我と云ふ。そこには一として常住なるものがなく、又常一主宰としての我と云ふものがないからである。

□ 乍然それとは私共の身心の現象に關する表面の研究に外ならない。身心そのもの、因縁生なるの研究である、之に反して更に身心の本源たる私そのものはないであらうか。

□ この意味に於て、宇宙と人生とを考察すれば宇宙と人生とは本來一体にして不二である。宇宙を離れて人生はなく、人生を離れて宇宙はない。

□ 宇宙を全体と見れば私共は其の一部である。從て、宇宙の現象と其の實體との關係は直に又私共の現象と實體との關係となる。然に宇宙の現象は皆これ因縁の所生であり、私共の身心は即ち其現象の一部である。

□ 之に反して、宇宙の實體は本來常住のものであり、因縁によつて生じたものではない、從つて宇宙の一部たる私共の身心の實體も亦宇宙實體の一部として、天地と共に本來常住なものではないか。

□ この常住の自覺、即ちそれが永生の自覺であり、それが即ち不滅の自覺である此の意味に於て、眞實の自己を知るに自己の常住を知るものは永生の人となり、不滅の人となる。

□ 而し此の永生の上の自己、不の滅上の自己と云ふものが因縁によつて永劫に其の身心の相を造つて行くものであることに氣付くとき、眞實の自己を知るのである。(念)



活生たれ取のり礙

目次

凝りのとれたる生活 尅	子
人間の生活となつた私の宗教	土屋 觀道
旅日記	土屋 觀道
平几	吉本 辨道
吾朋便り	
行基寺別時三昧會參加芳名	

▽信仰は個人完成だと云ふて、家庭問題や、社會問題に觸れることを墮落のように思つてゐる人があります。それかと思ふと、宗教は社會改善である、人類更進であると云つて、無闇と社會事業や、社會施設の置廢に奔走する人があります。▽人間が一人だけで住んで居らぬ以上、個人の問題が直ちに社會に影響し、社會家庭の問題が直ちに自分の問題でなくてはなりません。今迄は自分一人だけが飯が喰へて居れば良かった、自分一人丈りが儲つて居れば、それで安心であつたが本當に皆が儲かつて行き、皆が喰へて行くのでなくては、本當の喜びでなくなつて來ます、一人だけが拔擲してもそれは全体として失敗であります。

▽だから自分が眞先きに進み、力を得ると共に、皆の者に等しく進み、力を得て貰はなければならぬ、即ち大自己の完成であり、綜合的進化でなくてはなりません。だから社會政策、大衆運動と云つても水の上へ油を流したやうな運動でなく、飽くまで自己を深めるが爲めの大衆運動であり、自己を深く見つめた上で大衆に向つて叫び、大衆を動かしてゆく舉衆的覺醒運動であります。

▽かゝる運動であればこそ信仰運動は、聲の運動でなく一言一行、一錢の費ひ方までが、身自らその第一人者としての提示とならねばなりません。(尅)

□信仰を持つて窮屈になるようでは本當の信仰ではありません。

□信仰を持つて自分がその信仰に融かれ、「自分」といふものが無礙に流れ出て來るのでなくては本當ではありません。信仰が厄介になつたり、信仰が荷物になるようでは、型の信仰であつて、教權信仰であります。

□信仰は生命であつて、そんな一定の形を持つて居りません、どんな形になつても、本當の道を、本當の態度で渡つてゆくやうに、燃え出る力であり、乞食になつても、大臣になつても、小使になつても頭取になつても、本當の筋を本當に生きる力であります。

□だから信仰に生きたれば樂であります、お體裁を造る氣がなくなるからです、世間の事は多くこの表へを造る事に骨が折られてゐます、だから肝心の中味の方へ力が行かず、苦勞の割に喜びがありません、いつも不快な氣持でハリツとしません、心の隅から晴れ渡つたやうな元氣に充ちることが出來ません。

□本當の信仰とはこの曇りのない元氣な「一道」に立つことであります、その一道とは何か古人は純一無雜清白梵行といふ六つかしい言葉で云つて居られます、釋尊は無上正眞道だと言はれました、無上菩提といふのも要するに自分を眞直に生かして下さる力に生きるといふ外にはありません、この本當の意氣に活きるこそ男子の本懷だと思ひます。

□自分の道を濁して生きるといふことは水臭い生き方であり、對手を馬鹿にした、見縊つたやり方であり、そして又自分をおろそかに扱つた生活であります。對手を偽り通せぬと尊ぶところに、本當に深く信じた敬虔さがあり、そして又自分を大切に抱へてゆく自愛の道であります。即ち天地を懷中へ入れ、自分も亦その懷中へ這入つて一枚になつた生活であります。(尅子)

人間の生活となつた私の宗教

土 屋 觀 道

同じ人間の生活でも、年と共に其の生活の内容が變り、又時と共に其の考へが變るやうです。而て、最近の私にはこの意味に於て、昔の私とは可なり大きな變化があります。乍然之はまた一面私が從來の佛教に對する信仰内容の變化であり、又私の家庭生活に於ける考への變化でありまして、今ではそれが人類の生活であり、又我が淨土教のまさに進むべき道であつたと思へてゐます。

私が初め出家したのは二十五才の春でした。而も當時の私は已に一種の信仰に居りましたが、それまだ今日から考へれば入信の初歩にも過ぎませんでした。乍然當時の私がいかに神人の生活を求め、一身を投じやうとしていたかは全く想像の外でありました。從て、一切の係累を捨て、全身を佛教界に投じたのも全くその爲めでした。從て當時の私がいかに昔の釋迦孔子キリストの生活を憧れたかも全く想像の外であります。從て私がそれら偉人の言行を喜び、自ら之に倣はんとして、心をそれらに注いだのも、一年や二年のことではありませんでした。從て當時の私が自然と之等の瞑想にふけり、從來の俗人生活から遠ざかつたのもそれが爲めでありました。

然に私の考へは之等の偉人を研究するにつれまして、可なりの變化を來たしてきました。而て、偉人の生活は必ずしも出家するのが能でもなく、寧ろ社會に出で、社會と共に眞に生きるにあると云ふこ

とが判つて來ました。之主として今より考へれば我大乘佛教の精神によるところであり、又釋尊自身の行動により、示さるゝ所でありましたが、又キリストの宗教宣傳の壯烈と法然上人の生活とがいたく私をして動かしたものであります。

二、

茲に於て、私の生活は自づと慈光宣傳の方へと傾きかけました。それは丁度私が宗教大學を出る頃からのことであります。凡そ人格と云ふものはたゞこれ人格ある行爲による。而て人格ある行爲とは何であらうか、それは人として生れたいある生活であらねばならぬ。而て生れたいある生活とは何であらうか、それはたゞ永遠の生命と無限の向上に立つことであらねばならぬ。

此の意味に於て、私は人生の眞意義を永生と向上の二に求めたのであります。さうして、永生の道としては彌陀の本願に乗じて、天地の大道に入ることであり、向上の生活とは即ち價値の生活であつて此の念佛の力によつて、社會の改善に盡すことであると直觀したのであります。言換れば眞實の人生は自ら道を求むると共に之を一般の人類に宣布することにあると信するやうになつたからであります。

かく申せば、私共の信仰は非常に高い理想のやうに聞えますが、之は私一人の信仰ではなくして、一切人類の本心の願であると共に、又佛の最も高潮して止まないところでもあつたのであります。

乍然こゝに一つの私の疑問は何故に僧侶は妻帯をしていかぬかと云ふことと、今日の僧侶は果して佛教で云ふところの正式の比丘であらうかと云ふ点でありました。さうして、前者に對しては凡そ人間の宗教として、何故に佛教は人類の妻帯を許さぬか、さうしてまた、人間の妻帯が果してさうまで悪いものであらうかとの疑問であり、後者に對しては、所謂多くの僧侶の生活をながめて、あまりに私の理想する人類の生活と相離れているものを見たからであります。而て其の結果は遂に私をして、僧侶必ずし

も妻帯を禁すべきでなく在家必ずしも僧侶より卑しくないとの結論に到達したのであります。否、寧ろ今日の結果から申しますれば宗教には出家と在家の區別はなく、僧俗の區別は單なる生活の形式に過ぎないと云ふことになりました。否それどころか、今日の私の宗教としては、一切人類の宗教として、僧侶も妻もち子もち家庭を以てこそ、眞の人類の生活であるべきと考へるやうになりました。之が私の佛教に對する大なる考への變化であります。是が文化が釋尊の生活は片寄り過ぎて居るかと上人を以て云はしめるに至るあり

さうしてまた、私はこのことを、佛教文化の發達の上に發見し、そしてまた、今後來たるべき人類の宗教は正に吾々の考へるやうな宗教でなくてはならぬとさへ信するやうになりました。

然ば佛教文化の發達とは何でありませうか、それは釋尊の佛教がいかなる形を以つて、今日の佛教にまで進んで來たか、言換れば釋尊の佛教が私共の意味するやうな僧俗を問はない、人類の宗教となつて來たかど史的發達の文化史的考察であります。

それは從來の宗教、特に釋尊の佛教に於て、其の當時形相は全く出家の形でありました。之は釋尊の發意であつたか、それとも印度當時のハラモン宗教に其の型をとつたか明かではありません。乍然釋尊求道の形式として、在家を捨て、出家の身となられたことは確かであります。從て、多くの佛弟子と云ふものが、釋尊の道を慕ふあまり、其の形までも釋尊に等しうして、出家の形となつたのも亦事實であります。

乍然この際、佛弟子と云ふものは出家のものに限ぎられて、在家の中にはなかつたものか、古來出家弟子のみを佛弟子として、在家の佛弟子は之を佛の信者として、扱つた傾きが多いのでありますが、それが果して正しいのかどうか、釋尊の説法も主として當時は出家の佛弟子にせられたものが多く、又眞

妻と子と共に
家庭の生活
を捨てて傳
道は止めま
すとき、云
ふ一あるも
亦是れに依
る

に解脱を求めやうとしたものも、主として出家の弟子のみにあつたかのやうであります。

乍然佛教思想の發達と共に、多くの佛弟子は單なる聲聞の比丘であきたらず、進んで佛陀と等しき佛地の生活にまで生きやうとして來たのであります。之が所謂大乘の佛教でありまして、佛心を宗とする菩薩の大道であります。之は一時大乘非佛説とまでなりましたが、釋尊自身の生活にまで心を注ぐものは直に佛陀自身の動的な生活の上に此の理想を發見せずには居られないものであります。此の運動が出家比丘の間に起らずして、在家の佛弟子に主として起つたと云ふことは非常に人類の文化宗教として、大切なことであると思ふのであります。即ち在家の菩薩と云ふものが、之であります。今までの主として出家比丘として行はれていた佛教が、在家佛教として復興して來たと云つてもよいのであります。而も、それがいつしか出家比丘の生活を聲聞比丘の生活として之を卑下し、自らを大乘の佛教として稱揚したと云ふことは一面在家佛教が出家佛教の上に位したことを意味するものであります。之一に佛心の躍動であり、佛教の道德化であります。又佛教の普遍化と申してもよいのであります。乍然出家は專門に之に従事し、在家は他に仕事があるため、いつしか此の理想は又出家にも菩薩ありとして、之にその理想をとられるやうになりました。之が即ち出家の菩薩であります。言換れば折角人類の宗教として在家の中に芽ばえて來た佛教が再び出家の佛教に還元せられたかたちとなつたのであります。

四、

之乍然、從來の菩薩大乘教が主として聖道門の型の上に現はれて來たのであつて、それが在家の宗教にまで來たのでありますが、あまりに高い上機上根の人でなければ行へない菩薩の大乘でありましたので、自らの行爲を深く反省する眞剣なる求道者には其の機根に於て堪えかねたのであります。從てそれが理想としては許され、又尊いことではありましたが、永く一般人類の實際生活としては行は

れなかつた所以であります。乍然この菩薩大乘の思想は比丘生活の内容の上に非常な展開を來たしました。即ち佛心大慈悲の社會的活動であります。而て其の後の佛教は殆んど悉く此の思想に動かされぬものはないのでありますが、此の思想が一面には諸佛成道の本願となり、一面には他力救済の淨土教となつて來たのであります。

即ち大乘佛教の思想發達は諸佛の成道が主として衆生救済の本願によつて起されて來たことを明にしましたが、それと同時に、此の思想を認むる佛教はやがて此の佛菩薩の救いの御手に許さる、ことを認めて來たのであります。而て、其の教の最も發達したのが所謂淨土教でありました。即ち阿彌陀佛は其の佛心窮極の大慈悲であり、其の對手は一切の衆生を抱合してあますところがないのであります。即ちいかなる時と所とを問はず、自ら如來の本願をして彼の國に至らんと欲するものは其の人の罪とがを問はず、等しく念佛するものは皆悉く救か行ると云ふ教へであります。

此の教へは印度ではあまり行はれず、支那に於て善導大師によつて強く主張せられ、我國に於ては法然上人によつて初めて一宗として建てられたものでありますが、こゝに初めて從來の佛教が普通の宗教として、在家の生活に現はれて來たかの感があります。即ち此の佛教にして、在家と出家との區別を絶し、又如來の佛心を認むると共に衆生の佛性を認め、さうしてまた、現實に即していかなる罪深き人も愚かなる人も漏らさず、等しく念佛の一行で佛地に進むことができる云ふことは今や大乘佛教の極地に到つたものと云つてもよいのであります。而て之を最も明に言顯はしたものは法然上人であり、之を家庭生活にまで現はしたものは親鸞上人であります。

五、

乍然それにしても、從來の淨土教は未だ充分といへぬ点が多々あります、それはまだ出家の生活を以

て在家の生活に勝るとなし、夫婦の生活や家庭の生活を以て、獨身の生活に劣るかの感にあるものが多からであります。乍然何故に出家の生活が在家の生活に勝るのでありませう、さうしてまた、何故に夫婦の生活が獨身の生活に勝り、親子の關係が凡情にすぎぬものでありませう。凡そ佛教の眞體は佛心を以て宗とするのであります。從て眞の佛教は其の心にあつて形ではないのであります。從てたとい、其の姿が比丘比丘尼の姿でありまして、心が佛心を離るれば外道であり、其の心が佛心を離れなければたとい其の形が外道の姿でありまして、それが即ち佛教であるのであります。從て眞の佛教は決して其の生活の形式にはよらないのであります。

此の意味から時代を達觀して建てたのが即ち私共の宗教であります。そこに夫婦の生活を許し、子供の出生を認めぬのでありまして、所謂すべての人類の生き活く道としての宗教であります。從て人類の生存を許す限り、夫婦の生活は許さるべきものであり、夫婦の生活が許される限りによつて生ずる子供の出生は決して否定せらるべきものではありません。若し子供の出生が否定せらるべきものでない限り、どうして其の子を愛育することが罪惡でありませう。それはたゞ、男女の性慾に左右せられて夫婦の情愛を欠き、親子の愛におほれて、社會の平和を無視するときにのみ、之等は禁せらるべきものでありまして、一切が佛心と共に寧ろ夫婦の情愛、親子の關係ほど美しいものはありません。從て釋尊の宗教は一切が佛心大慈悲の上に立つものならば必ずしも其の生活の形式を問ふものではないのであります。從て在家の菩薩も現はれて來るのでありまして、殊に淨土教として一切人類の生活に現はれて來たことは正しく眞實の宗教が今までの僧侶と云ふ特種的な宗教生活を捨て、全人類の社會生活の中に普通の宗教として現はれて來たことを示すのであります。

凡そ人類の生活に於て、否少くとも今日人類社會に於て、誰か自分の夫婦の生活を罪惡の結婚と信じ

て行ふものがありませう。そしてまた、誰か其の結果として生れて来た子供に對して、これ罪惡の結果なりとして悲しむものがありませう。今尙さう云ふ人が此の存在するならばそれらは未だ眞に人生の意味も知らず、未だ夫婦相愛の結婚の意義を知らないものでありまして、又子供に對する親としての眞情を無視した人の考へに過ぎぬのであります。此の意味に於て、眞に佛子の自覺に入つた私共の生活は同じく如來の子として許されたる最も祝ふべく又喜ぶべき夫婦の生活であり、それによつて出来たる自分の子供は又等しく如來より興へられたる佛子として限りなき喜びと望みと力の中に之をばぐみ育て、行くのが當然となるのであります。從て結婚は神聖せられ、子供の出生は祝福せられて来るのであります。そこに一夫一婦の戀愛は成立し、親子のむつみは許されて、一家もそのまゝ、慈光の生活に輝くのであります。所謂一家和合し、社會和合するの眞生の世界が初めて此の意味に於て出現して来るのであります。

六、

此の意味に於て、私共の宗教は從來の舊き形式を破つて、所謂身心自由なる佛陀の本心に歸つたのであります。而て、そこには所謂人類生活の根本基調たる家庭の生活を許し、從つて夫婦も親子も共に如來を中心として其のまゝの形の上に自由に生き生きて行くことのできる生活となつたのであります。言換れば私共の宗教は必ずしも、家庭を去つて出家せずとも、從來の在家のまゝで、夫婦相和し、一家相信じ、親子相むつんで行くところに、如來の佛地を樂しむことができるの生活となつたのであります。更に言換れば今までの佛教のやうに、在家を卑しむ、出家を尊ぶやうな生活でなくして、社會を肯定し家庭を肯定して、夫婦も親子も共に一緒となつて、如來の道にいそしむの生活であります。否それどころか、夫婦の生活を以て喜びとなし、親子の生活を以て樂しみとなし、而も其の事が單なる個人の私

事にあらずして、直に社會生活の一員としての公事として之を尊ぶものとなつたのであります。而も此のことは單なる私人の考へにあらずして、万人の心底に流れて止まぬ宇宙大生命の要求として、私共の心に現はれて來たのだと信するものであります。而て恐くはこれ人類生活の續かん限り、永劫に流れて止まぬ私共の願ひでありませう。

私が妻もち子もち家もちやうになりましたのも之が爲めでありました。而て、近頃僧服を脱いで俗服に歸つたのも之が爲めであります。言換れば今や私の生活は初めて人類と共なる生活に歸つた人間の宗教となりました。(三、四、二、越後見附今井氏方にて一三、五、一五、再三、四校東京にて)

旅 日 記 (四月、五月)

土 屋 觀 道

旅日記——越後 三條 四月四日

此の地は今から八九年前當地には可なりの同志があつて、一時は全町舉つての盛會でしたが、其後事情あつて一時全く音信さへ録になかつたところであり、然に見附の今井氏の努力によつて舊交を温むべく盡力せられ、又舊友の二三が之に策應して、此の度の會が催されることになつたのです。集るもの百二三十、會場としての淨樂寺は

一ぱいでありました、中にも當住職を中心として小池、澤、大谷の方々が非常な喜びと其の努力とは全く私をして衷心から感謝せしめずにはおきませんでした。

歸りは少々急ぐので夜の急行で立ちましたところ、柏崎では三十名の道友の方々が此の遅いのにわざわざ見送りとして驛まで来て頂いたことは全く御禮の申上やうもありませんでした。それにしても、かうして道の爲めに精進して頂けるかと思ふとき、そぞろに合掌せずにはおれぬものがありました。凡そ人の心の中

に於て、お互が信じ合い許し合つたほど此の世に於て嬉しいものがまたありませうか、私はいつも思ふのです、かうした人々の爲めに心から盡させて頂くほど人生の喜びはなく、又之ほど人生として仕合なことはない。五日の朝、上野に着くと、原様の奥様と家内が良子を連れて出迎へてくれました。歸つてから、急ぎ二階に昇つて、光道さんに會つたとき、彼が見かへるほどに生長してゐたのに驚きました。

●十一日からの行基寺の集りには十日の朝の急行で東京を立ちました、夕方行基寺に登りました。行基寺の集りは近年に至つて一層の道友の集りが多くなつて行くやうです、そして今回は総員九十名の上を越し、念佛も從來に比して一層精進せられたことは限らない喜びでした。殊に最後の晩の茶話會の感想談には少からず教へられ、しつくりした家族的道友の集の中に之から協力して其俱に精進努力しやうとの考へが全体に行き届いていたことは更に一層の喜びでした。

▼十八日の晝間は丁度各地遠近の國々の人の集りを好期として何か親睦會を開かうと云ふので、汽車で一同養老の瀧にまいりました、丁度天氣は真し、氣候も上々、全く申分のない好期會でありまして、特に多忙の中を岐阜大垣の方々が例年になく集つて

頂いたので、全く時の過るのを忘れるほどでした。夜は四日市の中野眞生製陶所での集りでした、行基寺様始め七人の人々が養老から引つゞいて隨喜せられ、先方でも一しほの喜びでした。

●十九、二十日は名古屋の集りでした。そこで十九日には早々四日市から彼地へまゐるべきでありましたが、朝の間五六の道友と佐屋の黒宮氏を御訪ねいたしました。越後の人々や静岡、岐阜の方々に初めての人々もあつたからであります。

名古屋での集りは晝の午后から念佛と講話でした、夜は縣の社會課から來て主として、教育映畫の活動寫眞がありました。人よせと共に普通教育としての新しい試みとしては可なり効果があるらしかつた。集る人も一ぱいでした。道友の盡力又大なりと云ふべきです。

二十日の日は行基寺様と越後の原様と小泉様と名古屋の郷津さん五人で朝のうち、覺王山に自動車を持ちました、午后は道友の集りで念佛と法話です、夜は座談會及び最後に、今後の名古屋に於てどうして新しい道友を作るかについての相談會がありました。それには自分だけの聴聞や念佛ではあきたらぬ、自分の信仰を進めることは云ふまでもないことであるが、吾々は又吾々程度にそれ相當の社會的慈光宣傳の第一歩に立つといふこともなければならぬ、ついでに今后願くばたい一人づつでもよいから

せいせい積極的に奮戦努力しやうと云ふことでした。道友の仲もかうなれば占めたものだと思ひます。

●大阪同盟

大阪では二十一日を晝を西成區役所の方々に講演、夜は北市民館で眞生俱樂部の講演會でした。後者は今度眞生道友と市民館長志賀氏との間に意氣投合して、以後智識階級方面の集りを催すといふ考へで出來たものです。主として各種の方面から眞生の道に立たうと云ふ集りです。同志の近頃はない元氣と精進の心に私は嬉しさの涙さへ催しました。二十二日は生玉寺町の長圓寺で園遊會を開催しました、不幸にして雨天でしたがそれでも道友の集りは百名に近かつたのです。各自一家を舉つて集まり、朝の講演や晝後の福引きや、夜の座談會など一として心からなる睦みでないものはありませんでした。それに今回は特に清水の中村辨康師や津島の中野善英師、其の他大垣の桑原省三氏、岐阜の古賀氏、北越の原の奥様、其の他神戸、尼ヶ崎方面の道友が朝から集つての喜びは限りない喜びでした。信仰の温まると云ふことは専修念佛の大切であることはもとよりであります。

時々かうした家族的集合の中に、眞にお互の友情を温めると云ふことが如何に大きな効果があるかと云ふことはかうして集つて見るによつて、一層その効の偉大なるもの、あることを知るのであります。

●静岡の集り

二十三日は早朝急行で大阪を立ちました。中村師と中野師と私の三人でした、中野師には一の宮で別れ二人は静岡の關様に着、夜の講演會に出ました。此の會は關氏の父君の御他界に因んで、之を紀念して眞生運動に資したいとの願でした。栗生、藤井の御兩氏を初め當地の道友は全力を注いでのビラ張りや新聞での廣告で、集るもの二百に及び、當市としては近頃でない盛會であつたとのことでした。中村師は信仰の世界を題し、私は人生の眞意義を題しました。會館も丁度手頃もので話もしよく心から歡喜に満されました。此の地は已に十年前から私にとつては結縁の地です。そして終始を一貫した栗生氏の御盡力は遂に今日の集りとなつてまゐりました。静岡に再び春が來たやうで

す。回春の曙光が輝いて来たやうです。

●焼津

二十四日は晝過ぎまで静岡でした、夕方になつて、焼津に行きました、五六の道友は三度も驛まで出迎けて頂いたやうです、其の熱心さと心やすだてに限りない感謝の心でありました。夜の集りは五十名許り、集る数は多い方ではありませんが此の地も段々道友の熱心さを見ることができるようになりました、割合に今まで宗教心にとぼしかつた此地としては反つてゆつたりとした、眞の宗教が芽ばえて来たやうです。五六の道友の方々は抜くことのできない力さへ見えて来ましたことは又どない喜びです。因に當光心寺上人の御母堂が突然病没なさいましたことは限りない悲しみの一つでした。先回までは非常な丈夫さを誇つて喜んでゐましたのに、今日の有様は全く人生のあてにならない無常の一面を垂示せられた感じがしました。

▼歸京、二十四日焼津を終つてから、其夜行で歸途につきました、寮に着いたのは二十五日の朝五時半でした。歸るに長女が風邪さかて床に居りました、二十六日にはハシカと判り熱も高いの

とは可なり大きな變化であります。此の意味に於て、私共の前途には限りなき大きな望みと力と喜びとが輝いて居ります。(三、四、三〇) 於東京

▼追記 五月十五日。其後五月の一日となりまして、美智子の發熱四十度八分となり、三日に至つて長子遂に又ハシカで床につきました。之より先き各地の傳道に己に斷つて置きましたが黒宮様の三昧會は年中一度の行事ではあり各地から集まる方々もあるので、御斷りも出来ず大困りでした。光道に感染させまいと二階に母親と隔離している爲め下では二人の子供が私居なくては全く仕様がなくなりました。生れてからこんなに困つたことはあまりありません。其の後一日黒宮様へ御斷り方々隨喜し、殆ど日歸りに歸りまして、其後も引つゞき看につきました。近頃はおかげで二人とも床を離れ、光道にばまた感染の模様がないうですが今後どうなりますか、またその用心をします。従つてそのため、出すべき眞生も手につかず、只今漸くそれができあがつた始末です。

それにつきまして、また各地の道友の方々に色々の御心配をかけました事を衷心から御禮申上ります。願くば私の不徳を許して今後の活動に御助力のほどを願上ります。

●因に各地の道友の中に近頃たくさん御子様が生れです。所謂第二世の同盟の方々かと思へば一層の喜びです。

越後方面では佐藤益章様に正様(男) 會田祉様

で心配でした、長子と光道とに感染させまいとつめていますがどうなることやら、子を持つて親のなやみなしにみと感ぜずにはゐられませんでした。健康な子供の顔を見て喜ぶ親の心はそれがそのまゝ、子の病床を見ては悲しむ親心であります。まだ八歳にしかならぬ子が四十度何分の發熱に若しむさば親として可なりにひどい悩みです。あわれにも又同情に堪えぬものがありました。

●二十九日、かねての約束のこと、て、浦賀の八幡にまゐりました。主として在郷軍人並に青年團の春季總會に對する講演であります。題は國民の自覺と題しましたが、第一國民思想の統一と反省に於て、公私一如の全一の世界を説き、其の生活の充實として經濟生活と政治問題に就て、其の反省を促しました。當地には丁度一年ぶりの事として、道友の人にも心から迎えてくれられました、たといほそぼそでもかうした心からの歡迎こそ私の衷心から歡びとするところであります。

以上はたゞ四月中を通じて見た道友の集りにすぎません。乍然此の間日にまじ道友の間に於て、自ら道を求むるの士の可なりに多くなり行くのと又それと同時に此の喜びを多くの人々に傳へたいとの運動が各地に起りかけて来たことの著しいの

に正道様(男) 岩下祥兒様に寵様(女) 今井善吉様には近々 浦賀の長島様に御嬢様。津島の中野善英様に同く御嬢様。清水の中村辨康様に御嬢様名古屋の磯田様方に御嬢様。大垣の淺野様に御孫様(男)が御生れでした。お互に御喜び申しませう。

述 懷

常 生

●南無阿彌陀佛と口に唱へて居りながら、意も、身も念佛になつて居ない。嗚呼何たる臍甲斐なことよ。

●廣告や法螺ばかりで商品の實質が悪ければ駄目だ、俺の店は品質本位で決して廣告や法螺は吹かない、と大々的に法螺ばかり。

●慢心する様な事では信仰の退歩である、乃公の如きは信仰に這入つて幾年目であるが決して自慢などはせない。と自慢話に花が咲く。

平凡

吉 水 辨 道

それは極めて平凡な生活である、信仰などいふことを、かつて口にしたこともなく、亦自身も一向左様なことを知らぬげに振舞つて、而も立派に信仰の道をあゆんでゐる人がある。金と隙とのある人達の「信仰道楽」イヤ「求道遊び」とひきくらべて見てはどうに尊い心地がする、このやうな人こそ心が合掌したい……。

震災で倒潰したあれ寺へ、ある和尚が新に任命されて住職した和尚けなげにも復興のために身を碎いて努力をつづけた、先づ朝は早く起きた、霜凍る厳寒の朝も、本堂跡のバラツクからは、きまつて四時には御観經の鉦の音が流れた、無道心の和尚のみ多い今日此の頃に、此の住職の行ひ振りには第一に近處の人達が頭を下げた、忽ち檀家の人達の心を捕へた、信用は日にまし加つて来た。

かうして本堂再建の機が熟して来て、人達は今や和尚の再建計畫を發表するのを心持ちに待つやうにまでなつた。

誠に寺も法も人に依つて尊い、さればいくばくもなく、和尚の努力によつて立派な本堂が再建された。

かくて一と月とたち二た月と過ぎ一年とたつた、さうだはんの

わづか一年とたつた今日だが、和尚の行ひ振りががらりと變つて終つたことは是非もない、うたひや、朝ねもする、酒も飲み始める暴言も吐く……、噫、この新しい本堂よりも、あの美しい莊嚴よりも、否々、そんな死んだ物ではない、すべてさういふものを産出す生きた力、いきた生命が住職の身から抜け落ちやうとしてゐる。

親切な友人が忠告すると、和尚も流石にざんげはする、そして泌々した口調で答へる、曰く、實は本堂が出来終つてからは、いはば私の土台が出来て終つてからは、幾ら力んで見ても、一年前のやうな緊張がもどつて來ない、實際もう朝なども早く起きられないのだから仕方がない、イヤ第一モ早そんな必要をみとめないのだ、世間だつていつまで……。

あ、悟後の修養のより尊いといはる、喜は此處だと感じた。利養か、名聞か、少くとも優越感か、いつまでいつても、どこまでいつても、昔のやうに喰付いて來て人間から離れやうとしないこの心、併しながらその心あればこそ人間が生きるこの心、つくく古聖の名利をすて、跡を晦ました芳觸を思ふ。

あれは、初めから名の無いことこそよけれ、利の無いことこそよけれ、従つて隙の無いことこそよけれ、平凡にして道にかなつた人こそほんとうに世にも恵まれた人でなければならぬ。

吾朋便り

▼巢鴨町 木下忠男様より

何さなく大愛の中に抱かれた心地が致し誠に喜ばしく御座いました、説かれる所一言一句が我もの、様に思はれ、お互に真に生きるを承はる時大なるミオヤの尊さをつくく感じさせられます。

▼大垣市 是永薰様より

拜啓昨日は參上尊願の麗はしきを拜し得ました上に熱烈なる御垂教を聴聞出來ました事は言辭にも盡し難い喜びで御座いました。私は行基寺は始めてでありましたが、如斯風光明媚の聖地が近郊にある事もしりませんでした。此聖地で十五年も遭はない野田君に會ひましたのも御佛のお力だを信じて疑はないのであります。

私共無智不信の輩にも御垂教聴聞の度毎に偉大なる力を感じる様になりました、やがては皆様と同じく如來の赫々たる光明に接し得るものと存じまして一増精進致度思ひます先は失禮をも不顧端書を以て御禮申上ます。

▼尼ヶ崎市 橋本政一様より

吾々は何時迄も上人許りに頼つて居る時代

ではないので上人の心を心として立つ時にそこに御佛の力が湧くのを感じます、ほんとうに吾々同人はもう早く一人も残らず上人の御自覺に迄進ましてもらはなくてはなりません、眞理に打ち立つ處にはそこに恐れる何物もないのです、今回上人の御越し下されないので反つて吾々に對する無限の恩寵であると感じ寧ろあらん限りの力をためして見たいと思つて居ります。

▼大阪眞生同盟 豊田省三様より

先日はお蔭を持ちまして誠に賑かな同盟の園遊會に参加させて頂きまして心からお禮を申し上げます、當地も北市民館を中心としたしまして眞生主義が大に世間の注意を引く事と心ひそかに悦んで居る次第であります、大阪にての情勢が實に全國的に波及して參る事と信じますので同盟の若手連中は頗る熱心に奔走されつゝあります事は御同慶に堪へない次第であります。

▼高松市 堀江義廣様より

さて上人を再び當地に御來教をお願する機運に向つて参りました。實は青年會（高等商業）の主催で来る五、六月頃か十一月内外に

▼大垣市 桑原省三様より
南無阿彌陀佛

私し一作夜當地昭和館にて梅原眞隆師の講演會開催に付佐屋より歸りました。今回佐屋へは御出惡き所を態々御越し下さいまして御心中御察し感謝して居ります。さて御病人様御經過は如何ぞ存被候光道様には御感染不致哉御案し申上居候何卒御大切に御保養被下度奉祈候

◎舉母町にて土屋觀道様より編輯部へ
本日舉母町の方へ行くさゝころです、五六七
の三日間彼地です。
次に八、九日を名古屋へ参り一晚を渡部様
他を近藤様、十日は大垣、十一日は岐阜の
つもりです、十五、六日頃から越後の方へ
行くつもりですが之は未定です。

行基寺
春季
別時念佛三昧會參加芳名

東京市神田區江川町	神谷たれ	同
東京府下目黒町中目黒	谷口春沙觀	愛知
大阪市東成區林寺町	新飼爲義	同
同 此花區西島町北港住宅	野田三郎	同
島根縣濱田京町	佐々木つる代	同
長野縣上諏訪町	藤森彦	同
同	松尾明三郎	同
同 上伊那郡西箕輪村	原はな子	同
大分縣宇佐郡北馬域村	永松千代	同
新潟縣柏崎町本町	岩下祥兒	同
同 上柳橋	原さみ子	同
同 上原村	小泉きゆみ	同
同 尼ヶ崎市大物東横堤	新飼治郎	同
和歌山市茶屋町	有本光治郎	同
沼津市淺間町	辻つや	同
静岡市札ノ辻九	關秀子	同
三重縣飯南郡大石村	谷口家實	同
同	石川一男	同
四日市市北河町	中野りゆう	同
同	中野里子	同
同	吉川武二	同

現 在 年 齡	性 別	數 計	入 信 年 齡	性 別	數 計
一—二〇	男	三	七	男	五
二一—三〇	女	四	二	女	二
三一—四〇	男	九	一	男	二
四一—五〇	女	七	五	女	七
五一—六〇	男	五	四	男	四
六一—七〇	女	四	七	女	一
七一—八〇	男	二	八	男	二
八十一—九〇	女	〇	二	女	八
九一—一〇〇	男	七	一	男	二
一〇一—一一〇	女	四	一	女	一
一一一—一二〇	男	二	四	男	一
一二一—一三〇	女	一	四	女	一
一三一—一四〇	男	一	四	男	一
一四一—一五〇	女	一	四	女	一
一五一—一六〇	男	一	四	男	一
一六一—一七〇	女	一	四	女	一
一七一—一八〇	男	一	四	男	一
一八十一—一九〇	女	一	四	女	一
一九一—二〇〇	男	一	四	男	一
二〇一—二一〇	女	一	四	女	一
二一一—二二〇	男	一	四	男	一
二二一—二三〇	女	一	四	女	一
二三一—二四〇	男	一	四	男	一
二四一—二五〇	女	一	四	女	一
二五一—二六〇	男	一	四	男	一
二六一—二七〇	女	一	四	女	一
二七一—二八〇	男	一	四	男	一
二八十一—二九〇	女	一	四	女	一
二九一—三〇〇	男	一	四	男	一
三〇一—三一〇	女	一	四	女	一
三一十一—三二〇	男	一	四	男	一
三二一—三三〇	女	一	四	女	一
三三一—三四〇	男	一	四	男	一
三四一—三五〇	女	一	四	女	一
三五十一—三六〇	男	一	四	男	一
三六一—三七〇	女	一	四	女	一
三七一—三八〇	男	一	四	男	一
三八十一—三九〇	女	一	四	女	一
三九一—四〇〇	男	一	四	男	一
四〇一—四一〇	女	一	四	女	一
四一一—四二〇	男	一	四	男	一
四二一—四三〇	女	一	四	女	一
四三一—四四〇	男	一	四	男	一
四四一—四五〇	女	一	四	女	一
四五十一—四六〇	男	一	四	男	一
四六一—四七〇	女	一	四	女	一
四七一—四八〇	男	一	四	男	一
四八十一—四九〇	女	一	四	女	一
四九一—五〇〇	男	一	四	男	一
五〇一—五一〇	女	一	四	女	一
五一十一—五二〇	男	一	四	男	一
五二一—五三〇	女	一	四	女	一
五三一—五四〇	男	一	四	男	一
五四一—五五〇	女	一	四	女	一
五六一—五七〇	男	一	四	男	一
五七一—五八〇	女	一	四	女	一
五八十一—五九〇	男	一	四	男	一
五九一—六〇〇	女	一	四	女	一
六〇一—六一〇	男	一	四	男	一
六一十一—六二〇	女	一	四	女	一
六二一—六三〇	男	一	四	男	一
六三一—六四〇	女	一	四	女	一
六四十一—六五〇	男	一	四	男	一
六六一—六七〇	女	一	四	女	一
六七十一—六八〇	男	一	四	男	一
六八十一—六九〇	女	一	四	女	一
六九一—七〇〇	男	一	四	男	一
七〇一—七一〇	女	一	四	女	一
七一一—七二〇	男	一	四	男	一
七二一—七三〇	女	一	四	女	一
七三一—七四〇	男	一	四	男	一
七四一—七五〇	女	一	四	女	一
七六一—七七〇	男	一	四	男	一
七七一—七八〇	女	一	四	女	一
七八十一—七九〇	男	一	四	男	一
七九一—八〇〇	女	一	四	女	一
八〇一—八一〇	男	一	四	男	一
八一一—八二〇	女	一	四	女	一
八三一—八四〇	男	一	四	男	一
八四十一—八五〇	女	一	四	女	一
八六一—八七〇	男	一	四	男	一
八七一—八八〇	女	一	四	女	一
八八十一—八九〇	男	一	四	男	一
八九一—九〇〇					

家傳宗派

性別	計數
男	二四
女	二七
男	一七
女	一〇
男	一
女	三
男	一
女	一

求道ノ動機

性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
數計	五二〇	一五四	四二六	三三〇	六一六	四五一	一一二					
死別	自己反省	家庭不和	厭世	偶然	病	生ノ不安						
職業	農(一二)	商(二三)	會社員(一〇)	教師(二)	醫師(三)	陶器(三)						
	工業(三)	雜貨(四)	僧侶(四)	畫象(二)	釀造(二)	學生(四)						
	旅館(一)	裁縫(二)	軍人ノ妻(三)									
希望	社會ノ發展	自己向上	眞生同盟ノ發展									
	一〇	一二	四									

葛上つき子	同	古渡町堀本屋	尾上ぎん子
本田實三同	同	松坂い子	本田豐七
本田シヨウ同	同	山本よしね	山本ちよ子
野々村學念同	同	長室美津子	栗野幸作
黒宮平八同	同	所さも子	若園清作
黒宮孝壽同	同	川合村	若園美彌
河村政幸同	同	安八郡神戸町	服部蓮芯
藤井鶴次郎同	同	中鄉村	佐藤
同	同	永徳庵	和政子
淺野孝眼	大垣市室町	本町	和田幸子
小田のぶ同	同	鳩部屋町	服部さみ
鷺津太一同	同	廓町	桑原よし子
近藤正子同	同	鳥見町	服部一男
伊藤留吉同	同	高屋町	淺野寅次郎
瀧澤愚佛同	同	岐阜市佐久間町	是永
渡部善兵衛同	同	矢島町	古賀清一郎
同	同	本誓寺	同
永田貞雄	同	松浦重三	白旗靈光
中川五十子同	同	港町	同
並川こひな同	同	同	同
渡邊初枝同	同	同	同

